

序

2014年春に登場したSGLT2阻害薬は、創薬の段階から臨床開発に至るまで終始わが国がリードしてきた新規糖尿病治療薬である。既存薬にはない作用機序によってきわめてユニークな有効性、安全性プロファイルをもつ。わが国では、すでに6製剤が使用可能であるが、市販後2年以上を経過した現在も浸透率は予想を超えて低く、実臨床における科学的な有用性の評価がいまだ不十分な状況にある。

臨床応用がさほど進まない理由として、安全性への過度の懸念が、医療者の意欲を削ぎ、処方際に必要以上に慎重になっているとの指摘もある。しかし臨床治験では既存薬と比較して、安全性に関して特に問題はなく、加えて既存薬にはない多面的な作用の有用性が評価され、承認に至った経緯がある。さらに市販後の高齢者特定使用成績調査の結果は、高齢患者においても、安全性に関して臨床治験で得られたものと一貫していた。その結果を受けて、適正使用に関するRecommendationの高齢者の取り扱いも改訂された。

いかなる治療薬、治療法も絶対に安全なもの存在しえず、一定のリスクを伴う。それゆえに、処方医は患者ごとに、薬剤のリスク・ベネフィットのバランスを考慮した治療が求められる。SGLT2阻害薬は、血糖改善に加えて肥満改善・心血管危険因子の改善といった、既存薬にはないベネフィットを備えている。しかもEMPA-REG試験では経口糖尿病治療薬のなかでは唯一、心血管死、総死亡、心不全による入院、腎症の進行を有意に抑制するとのエビデンスが実証された。最近、EMPA-REGの全患者とアジア人患者を比較したサブ解析結果も公表されたが、アジア人ではその効果はさらに顕著であった。心血管疾患の既往患者での結果とはいえ、そのインパクトは無視できないものである。

一方、SGLT2阻害薬の副作用の多くは、その作用機序から予測できるものであり、回避・対策が可能である。ある意味、糖尿病患者のlife saving drugともいえるSGLT2阻害薬が正しく認識され、今後の糖尿病管理に大きく寄与することを願うものである。そのためにも日本糖尿病学会の有志によるSGLT2阻害薬に関する適正使用委員会によって公表された「SGLT2阻害薬の適正使用に関するRecommendation」の真意を十分に理解し、それに基づく適応の判断、適正使用が求められる。

多面的な作用をもつSGLT2阻害薬は患者のQOLの維持，寿命の延伸という糖尿病の真の管理目標達成に寄与する可能性を大いに秘めており，患者満足度を十分に満たしうる治療薬である。本書は，わが国におけるSGLT2阻害薬の臨床応用の手助けとなるように，2型糖尿病薬物療法における本薬剤の役割，位置付けについて，できる限りわかりやすい解説を心がけた。そのため，まずSGLT2阻害薬への疑問に対して解説するというQ&Aの形で，本薬剤に関する最新の適切な情報を提供している。さらに実臨床での応用のポイントを具体的かつ適切に理解していただくために，実際に遭遇すると思われる症例を多数呈示して，それぞれについて詳細に解説している。

今は糖尿病患者の多くを非専門医が管理する時代である。専門医はもちろんであるが，むしろ非専門の先生方に本書を十分に活用いただいて，SGLT2阻害薬の有用性評価に役立てていただけることを願っている。

2017年1月

川崎医科大学総合内科学1 特任教授
加来浩平